

第九表 家庭生活の観察と知能検査
(出生順位)

出生順位	人数	家庭生活の観察 — 知能検査
一番目	13	-1.07
二番目	17	+9.47
三番目	10	-5.20
四番目	2	+8.50

なお、この調査で、母親の学歴について調べたところ、第八表のようになり、小学校を出ただけの母親は、人数はわず

第八表 家庭生活の観察と知能検査
(母親の学歴)

母親の学歴	人数	家庭生活の観察 — 知能検査
小学校	3	-5.00
女子校	27	+6.00
専門学校	8	+5.88
大学	8	-2.88

かった。日本保育学会の検査は、かららずしも知能のみをみようとするものでなく、知識や常識を相当含んでいるから、この調査の結果の解釈はやや複雑であるが、勝手な行動をする幼児、気の散りやすい幼児、あきやすい幼児などが、母親による幼児の家庭生活の観察の結果よりも、検査室におけるテストの結果が低くでていた。

かであったが、検査の結果よりも子どもをよくみる傾向がうかがわれた。(また大学を出た母親にもおなじ傾向があらわれたが、これは、幼児が家庭における教育や文化財にめぐまれて知識や常識が発達していることも一つの原因であろう。母親の理想が高いことも一つの原因かもしれない。)

また、同胞中の順位をしらべたが、有意差はなかった。(第九表参照)

(筆者は愛育研究所員)

保 育 (新刊紹介)

子供はどのように成長していくか、又どのように育てていかなければならないか、

子供は一人一人にそれぞれ素質や環境による個人差があり、またこれと同時に子供と一緒に遊ぶ大人、子供を指導する大人にも又、それぞれの考え方、やり方があり、持ち味がある。

いかなる場合にいかなる指導方法をとったらよいか、どのような子供にはどのような考え方をしたらよいか、

等に、問題は千差万別である。

これら多くの課題を前にして、長い間の貴重な体験から著者は子供の代弁者として、大人の良心に何を訴えようとしているのだろうか。

本書を通読し、その特徴ともいえる「幼児教育の現場にある者として必要な予備知識、例えば幼児の身体的発育の状態や精神的発達の状態を、指導の実際的な面と関連づけた所」ここに本書の価値を見出す、最後に最も心に残るもの。

それは、本書の全面に、活字の一つ一つに著者の人間味豊かな温かく、大きく、広く深い「愛」の溢れていることである。

書 名 保 育

著 者 お茶の水女大教授 同附

属幼稚園長
及川 ふみ

A5判 上製二一〇頁三二〇円

発行所 光 生 館